

炭

鉦の縮小による失職の危機から、フラダンスで再起を遂げる町おこしの物語。いわき市といえば映画『フラガール』を想起する方も多だろう。だが、ほかにも知る人ぞ知るスポットがある。それが塩屋埼灯台だ。周囲を一望できる絶景を堪能しようと、多くの観光客が訪れる。

昭和の歌姫・美空ひばりさんが亡くなる2年ほど前に歌った「みだれ髪」は、この灯台を舞台につくられた。その縁で、塩屋埼の辺りにはひばりさんの遺影碑や歌碑が建てられている。毎年多くのファンが訪れ、ひばりさんを偲ぶ。

◆自らを守る木を自らの手で

塩屋埼灯台を中心に南北に広がるのが、豊間と薄磯である。波の穏やかな薄磯は、年間26万人を集める県内屈指の海水浴場だ。反対に波が立つ豊間は、若いサーファーで賑わう。その客を見込む民宿と小規模な水産加工業が、両地区の主たる産業となっている。

里山のDNAを未来へつなぐ

福島・豊間／薄磯震災復興土地区画整理事業

(2013年◆平成25年から実施中)

新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



変わる日本の「暮らし」と「まち」

31

2011年3月11日、8・5メートルの津波が両地区を襲う。豊間は769戸のうち689戸、薄磯は344戸のうち326戸が全半壊した。塩屋埼灯台は破壊を免れたが、約8カ月間にわたって消灯を余儀なくされた。津波に飲まれたピアノを自衛隊員が処分せず残し、それを修復した「奇跡のピアノ」のエピソードは、薄磯地区の豊間中学校が舞台だ。

この甚大な被害からの復興を担ったのがURで、豊間と薄磯の区画整理事業を進める。復興プランは7・2メートルの防潮堤を建設し、10・2メートルまで高上げした防災緑地を海岸から50メートルにわたって整備する。高上げで使う土は背後の森から切り出し、その高台も宅地として整備する。

切り拓く森は豊かな自然をたたえる里山だ。復興のためとはいえ里山がなくなる。これを地元住民がどう見るか。新たに生まれる緑地をどうつくるべきか。4回のワークショップで住民の声が集めら



れた。福島県いわき建設事務所復興・復興部の芦野英明部長は、防災と教育の融合を模索した。「将来、自分たちを守る緑地の木を、子どもたちを含めた住民で植えられるか」と考えました」

住民も「自分たちの手でまちを再生したい」と声を上げた。URいわき復興支援事務所の栗城英雄は、各地で行っている「どんぐりプロジェクト」を思い出した。

「どんぐりプロジェクトは、どんぐりを通じて里山のDNAを承継するのが主な目的です。豊間と薄磯では、住民が終わりの見えない復興に向けて耐えています。自ら復興の現場に参加することで、モチベーションの維持ができるのではないかと考えたのです」

こうして、住民、県、市、UR

が手を携える形でプロジェクトのスタートが切られた。

◆木の成長が復興の証に

どんぐりプロジェクトは、伐採される里山に生育する木のどんぐりを拾って苗木に育て、それを公園緑地に植える取り組みだ。里山のDNAを緑地に移し、未来へつなげることができる。



里山のDNAを継承して木々を育てる「プロジェクト」がスタート



大きく分けると、3つのステージに進められる。第1ステージは

地元住民や子どもたちが里山のどんぐりを拾う。昨年10月に実施され、コナラ、スタジイ、カシなど3種類のどんぐり7500個を集めた。第2ステージはどんぐりの苗の育成だ。地元の豊間小学校をはじめ、県、市、URなどでも育てている。薄磯の区長を務める鳥居喜一郎氏はこう語る。「多くのどんぐりが芽を出し、大きいもので25センチ、小さいものでも15センチまで育っています」

まちを守る木を自分たちで育てることでもまちへの愛着が増す。子どもたちが苗木の育成に取り組みことで防災意識が高まる。これがどんぐりプロジェクトで期待できる効果だ。さらに、県外の人に苗木を育ててもらうことで、支援の輪の広がりも期待できる。URいわき復興支援事務所所長の佐藤秀城はこう語る。

「神奈川県藤沢市の中学校で2500本の苗木を育成してもら

っています。彼らが復興の応援団になってくれればいいですね」

どんぐりプロジェクトにはもう一つの柱がある。鳥居氏が言う。「このあたりは、昔からハマナスの花が咲いている光景が当たり前でした。でも、震災前からだんだん少なくなっていたのです」

津波が追い討ちをかけ、ほとんどのハマナスが流された。薄磯の副区長を務める鈴木幸長氏は、わずかに残るハマナスを見つけた。「その新芽を切って挿し木をしてみると、根がついたのです。これはまちを元通りにするのに役立つと考え、みんなに広めました」

住民たちの手で育てたハマナスも、ゆくゆくは公園緑地に移植したいと鈴木氏は意気込む。

「あまりにも被害が大きく、復興といってもどこから手をつけていかわかりませんでした。URさんがまちに入って、どんぐりプロジェクトを提案してくれたおかげで現在の活動があると思っています。これを原点として、まちが元

に戻ればいいですね」

来年には、育てた苗を緑地に移植する第3ステージに入る。ただし、苗が育っていくには緑地の維持・管理作業が鍵を握る。URの栗城は語った。

「高齢化の進む両地区では、行政と住民だけでは厳しい。そのためにも応援団が必要なのです」

他地域で展開されるどんぐりプロジェクトには企業などの支援があるが、豊間と薄磯にはない。福島県いわき建設事務所復興・復興部の石倉信昌氏もこう語る。

「行政と住民のみならずはもちろんです。企業や団体にも参加していただきたいですね」

まちを守る木を育てる活動は、安心、安全なまちづくりに直結するものだ。その活動を支援することも、復興への力強い後押しとなるのではないだろうか。

街に、ルネッサンス



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作] 新潮社